

成城小学校『児童文集むさし野』第四輯について： 背景としての戦時下

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 熊木, 哲 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1300

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



成城小学校『児童文集 むさし野』第四輯について

——背景としての戦時下——

熊 木 哲

発行所を「成城小学校」とする「児童文集」第四輯「むさし野」は、昭和十五年三月十二日を発行日付としている。表紙表題は何れも横組で、「むさし野」の下に「児童文集」、その下に「第四輯」。背表紙には「成城小学校」とあるのみ。

中表紙も横組であるが、「児童文集」の下に「むさし野」、その下に「第四輯」とあり、更にその下に「紀二六〇〇年」とある。「紀」は「皇紀」の謂。間に縄跳びの少女のイラストをはさみ、下部に「成城小学校」とあり、奥付の編集兼発行者は「銅直 勇」。成城小学校校長であり、昭和九年（一九三四）に就任『成城学園五十年史』。発行所は、「東京市世田谷区祖師谷二丁目成城小学校」。定価の表記はなく、発売が目的ではなかったことになる。

大きさは、縦二一〇ミリメートル、横一四八ミリメートルのA5版、全一〇五ページ。

以下、引用に際して、作者名はイニシャルで記し、旧字体は新字体に改めた。また、適宜改行を改めた。

一 『児童文集 むさし野』第四輯の性格と構成

この文集の性格は、「あとがき」(一〇五頁)によつて知ることが出来る。

▼ この「むさし野」第四輯には、今までの第一輯から第三輯までに出なかつた人の作品が載つてゐます。これに四年以上の人は、全部一度づゝ作品が載つたことになりませぬ。

▼ ことわるまでもないことですが、前に載つたのがよい作品で、後のがそれより劣つてゐるといふわけではありません。一度に載せることは出来ませんから、適当に分けて載せただけです。誤解のないやうにして下さい。

▼ 今度は詩が非常に少ないのが目立ちます。どの文を見ても、どの詩を読んでも、その作者なりに、ありつたけの力を尽して書いてあるのがわかつて愉快です。その点ではどの作品もあまり見劣りはありません。くらべて見て、よしあしをきめなくても、かうしてお互いに精一杯の作品を出し合ふだけで、充分に値うちのあることです。

▼ 一つ一つの作品について批評を書くことはやめました。先生に教へていただく外に、自分でもよく読んでみて、自分が綴方を書く上の参考にしていただきたいと思ひます。他の人の作品のよしあしが、ほんたうによくわかる人が、自分でもほんたうによい作品が書けるはずです。

▼ 紙の不足してゐる時ではありますし、第五輯から先は、どういふものをつくつていくか、今のところまだはつきりしてゐませぬ。しかし、皆さんの綴方の勉強の上に、出来るだけ役に立つよいものをつくつて行きたい考に違ひはありません。(国語研究部)

次のことが「あとがき」からわかる。

・この文集は、「成城小学校」の「国語研究部」によつて作成されたこと。

- ・表題に第四輯とあることでもあるが、これまでに第一輯から第三輯までが刊行されていたこと。
- ・この第四輯を刊行することで、四年生以上の総ての児童の作品が「むさし野」に掲載されたこと。
- ・この文集刊行の目的が、「綴方の勉強の上に、出来るだけ役に立つ」ことであること。

ところで、成城学園教育研究所には、「むさし野」が所蔵されており、第一輯は昭和十一年度の作品集であり、第二輯は昭和十二年度、第三輯は昭和十三年度の作品が掲載されていた。

つまり、「むさし野」は、年度毎の刊行であり、「第四輯」には、昭和十四年度の作品が掲載されており、「これで四年以上の人は、全部一度づゝ作品が載つたことになりました」とは、四年生、五年生、六年生で、過年度に刊行された「むさし野」に掲載されなかった児童の作品が、この第四輯に掲載されたということである。

また、第三輯までに作品の掲載がなかった児童への配慮として、「前に載つたのがよい作品で、後のがそれより劣つてゐるといふわけではありません。一度に載せることは出来ませんから、適当に分けて載せただけです」と記した。

この趣旨を児童に理解させるためであろうか、「あとがき」は、パラルビとなっている。ただ、「誤解のないようにして下さい」とも記し、その背景を示唆している。

「むさし野」の刊行目的は、第一輯の「編輯後記」に次のように記されている。

此の文集は、鈴木三重吉氏の所謂「代々の傑作の中へ子供を浸し入れ、肥らせては賞め上げて、なほひき伸ばす」目的を以て生れて来ました。つまり本校綴方科の鑑賞読本とする為であります。それ故、毎年一回宛出して行きますが、真に傑れた作品は作者の重複にかゝらず載せていくつもりです。

また、「此の文集は鑑賞読本であるとともに、本校児童の創作の道場でありたいと思ひます。二三の綴方選手を作るの

が目的ではなく、学校全体の水準を高めるのが目的なのです」とも記している。

つまり、「むさし野」刊行の目的は、第四輯「あとがき」にある、「他の人の作品のよしあしが、ほんたうによくわかる人が、自分でもほんたうによい作品が書けるはずです」の一節にある。児童の綴方を掲載することが目的ではなく、児童の「綴方の勉強」のために、多くの他の人の作品を提供することにあつた、ということになる。

「むさし野」第四輯には、全九四作品が掲載されている。以下の十二組について、『成城学園父兄名簿』（成城学園教育研究所蔵、昭和十四年六月十日成城学園後援会発行）により、学年とそれぞれの在籍児童数を付記し、掲載作品数を記しておく。

- 「梅組」〔二年生三二名〕 六作品
- 「竹組」〔二年生三二名〕 八作品
- 「柏組」〔二年生三一一名〕 八作品
- 「椿組」〔二年生二八名〕 六作品
- 「桂組」〔三年生三二名〕 八作品
- 「桃組」〔三年生三四名〕 九作品
- 「藤組」〔四年生三三名〕 七作品
- 「橘組」〔四年生三三名〕 七作品
- 「楠組」〔五年生三四名〕 一一作品
- 「松組」〔五年生三四名〕 二作品
- 「杉組」〔六年生三四名〕 一二作品
- 「白樺組」〔六年生三四名〕 一一作品

なお、「あとがき」に「今度は詩が非常に少ないのが目立ちます」とあるが、「詩」作品は九四作品中八作品。

九四作品は、内容によって次のようになる。

- ・授業や遠足などの学校行事、学校での出来事を内容とする「学校」群一九。
- ・放課後の出来事を内容とする「放課後」群一七。
- ・家族のことや家族旅行、飼い犬・猫などを内容とする「家族」群五七。
- ・自然を内容とする「自然」群一。

この九四作品に時局柄を内容としたり、用語や表現に戦時下色が見られる作品は、「学校」群で四作品、「放課後」群で一作品、「家族」群で二四作品。合計一九作品。約二〇・二二%ということになる。

二 「学校」群の作品における戦時下

「学校」群において、時局柄や戦時下色が見られる作品は、「日光」「かいせんゆうぎ」「強行軍」「冬はきらひ」の四作品。「学校」群では二一・〇五%。

その内容は、「日光」では、遠足に行った日光で「木炭バス」に乗ったというもの。

「かいせんゆうぎ」は、体操の時間に敵味方に分かれての鬼ごっこ。

「強行軍」（白樺組、H・F、男子）は、一年生から六年生までが、学校から京王閣まで歩いたというもの。次の一節がある。

大分足が痛い、しかし戦地の兵隊さんを思へば何でもない。今日の強行軍は面白かった。僕は今日皆と強行軍に行けるのも兵隊さんのおかげと思つた。

「冬はきらひ」（白樺組、S・K、男子）には、「さむくて学校へ行くのがいやになる」と記しながらも、「省線の中で、戦

地の兵隊さんは、これよりも、さむいのだろうと思つた」と反省する。しかし、「なんだ、このくらゐと思つたが、さむさはかはらなかつた」と、本音も記している。

三 「放課後」群の作品における戦時下

「放課後」群では、一七作品のうち、戦時下色が見られる作品は「せんそうごっこ」（樺組、Y・K、男子）。放課後、自宅に帰ってから「せんそうごっこ」で遊んだことが内容。

たんかをつくるので、つねかづくんのうはぎと、まるちゃんのうはぎと二人ともぬがして、ぼくたちはぼうを取りに行つた。

太いぼうを二本取つてきた。そしてうはぎをりようからいれてたんかをつくつた。そうして、ぼくたちは、とつかんしていつた。かきねのところ、まるちゃんがやられたまねをして、「やられた」と言つた。ぼくはささでつくつたはたをあげたら、うしろの穴の方から、ひろちゃんの、たんかをもつてきた。そしてまるちゃんを穴の中のやせんびよういんにはこんでいつた。

児童の遊びの中に「戦争」が入り込んでいくということであり、戦いばかりでなく、傷つく兵士がであることを児童が理解しているということである。

四 「家族」群の作品における戦時下

「家族」群では、五七作品のうち、時局柄あるいは戦時下色が見られる作品は一四・二四・五六％。

・「きのふのこと」では、「兵隊さんに慰問ぶくろ」を送るため、郵便局に行った。
・「きんろうほうし」は、日曜日に家族と自宅の畑で「きんろうほうし」をしたというもの。食料増産の為に空き地を畑にするというもの。

- ・「日記」では、歳末に父の実家に行ったところ「真影」が飾ってあった。
 - ・「かるた」では、正月の「ひらがな百人一首」に、家に来ていた「軍曹の田口さん」も加わったというもの。
 - ・「赤十字病院」では、「支那の戦争」で病気になった父の友人を見舞いに行った。
 - ・「兵隊送り」は、出征する親類の兵隊さんを見送りに芝浦に見送りに行ったこと。
 - ・「エリの出征」は、飼い犬が軍犬として「北支」へ「出征」するというもの。
 - ・「如水会のたからさがし」は、「木で作った機関銃」が当たったというもの。
 - ・「会社の魚取」には、漁船が「艦隊運動」をするというもの。
 - ・「夕方」(詩)では、「兵隊さんに慰問袋を出した」ことを思い出したというもの。
 - ・「たき火」(詩)では、たき火にくべた竹がはぜ、「支那兵の鉄砲の音のようだ」の表現がある。
 - ・「犬」では、満州事変で手柄をたてた軍犬を紹介している。
- これらには、身内に係わる戦時下は見られない。

次の引用は、「桂大尉の話」(藤組、I・N、男子)の一節。

(三) 慰問袋

十月三十一日太原を攻めて重傷を受けた桂中尉は、三月の末に中隊長として又第一線に出られた。このたよりが来ると、家では、すぐ慰問袋を作つて送つた。ようかん、飴、塩豆、ピーナツツ、たばこ、支那兵人形、だるま、夕オ

ルなど。それに僕は「桂中尉」といふ綴方を書いて入れた。弟は絵を、妹は日の丸を書いて入れた。兄さんは文集「もくせいの花」を入れた。

四月二十一日、桂さんからたよりが来た。

慰問袋ヲアリガタウ。僕ハ今討伐ニ出テ敵ト戦ツテキマス。カタノキズハモウヨクナツテダイジヨウブデス。アンシンシテクダサイ。

「もくせいの花」ヲ少シヨミマシタ。ヨンデキルアイダニ、タイヘンウレシウナツテ来テ、ヒトリデニコくシテキマシタ。コンバンゴハンガ終ツタラマタヨンデミヨウトタノシミニシテキマス。克チャンノタンクノエハオ上手デスネ。涼子チャンノ日ノ丸モウレシクテタマリマセン。述サンノ「桂中尉」ハ何ト言ツテヨイカオ札ノコトバガアリマセン。

皆ナカヨクシテオ父様オ母様、先生ノオシヘヲヨクマモツテ勉強シテクダサイ。僕モ一生ケンメイニセントウシテオ国ノタメニツクシマス。サヨナラ

四月十三日

桂中尉

この間桂さんが来て下さった時、慰問袋の話もあつた。僕たちの慰問袋がとどいた時は、桂隊のは皆に喜ばれたさうです。

だるまは部下の一人がむりにもらつたさうです。たふれても起きるといふのです。桂さんは、その人の遺品の中に入れておいて、兵隊さんの家へ送つたと言はれます。僕たちの小さなだるまはいつまでも勇士の家にあることとせう。支那兵人形は伍長にもらはれた。これを振ると両手で頭をこつくたくのです。僕たちは蒋介石だといつてゐました。この伍長は高い岩の上から落ちて「もうだめだ。」と思はれたが、命は助かつて内地に帰された。頭がへんになつたがふしぎによくなつて今は北海道にゐられるさうだ。近頃のたよりに「桂大尉からいただいた人形を大尉と思

つて大事にしてゐます。」と書いてきたさうです。

「もくせいの花」は兄さんと僕の文集です。戦地で桂さんは、部下の将校たちに皆読ませたさうです。一人の小隊長は、カバンに入れたまゝなか／＼返してくれなかつた。しかし桂さんは「僕が内地へ帰る時、たいていは部下にのこして来ましたがもくせいの花だけは、持つて帰りましたよ。」と言はれた。

題名の「桂大尉の話」のように、父が「京都の一中で教へた生徒」の「桂大尉」から聞いた話をもとにした作品。聞いた時期は、「えつかん線たちきつて漢口攻め」が終つて「内地」勤務となつた後のこと。漢口攻略は、昭和十三年（一九三八）十月二十七日。

「桂大尉の話」は、引用した（三）慰問袋のほか、支那事変（昭和十二年七月七日）前の天津に駐屯していたころ蒋介石軍からから首に五百円の懸賞金がかげられたという（一）五百円の首、支那事変で「天津からこう橋へ進軍し」「ろこ橋で敵と向き合つてゐる時うしろの通州に、はんらんが起き」それを鎮圧しに向かつたという（二）通州の日章旗、戦場での駐屯地でオンドルを焚きつけるために慰問の手紙を一枚ずつ燃やしてやつと火がついたという（四）封筒をたく、桂大尉が若く、他の中隊から軽く見られているので、「さんばつの当番」は、髭を残すようになり、それがうま／＼といった（五）ひげの五章からなるかなり長い作品である。兄と文集を作つていふことでもあり、文章を書きなれていふということが分る。

「慰問袋」は、「桂中尉」に送られたものであるが、「袋」に詰められたものが分る資料。「ようかん、飴、塩豆、ピーナツツ」といった、甘いものに塩気のものも入れられ、「支那兵人形」は敵を呑んでかかるものであり、「だるま」は縁起担ぎといったところか。

こうして買ひ集めたもののみではなく、弟の描いた「絵」や妹の描いた「日の丸」、兄と自分の書いた「文集」も入れ

て送ったという。こうした手づくりの慰問品に大いに慰められたことが「桂中尉」からのお礼の手紙で伝えられたが、「桂中尉」は、幼い弟や妹が自分で読めるようにとカタカナで書いてきたということである。

名譽の負傷

白樺組

T・Y（男子）

時は丁度去年の末の朝、僕が学校に行かうとしてみると中村の叔父さまが家にいらつしやつて、「哲が台湾で応召された」とおつしやつたので、びつくりした。哲といふのは僕の親類で中村の家のむすこの名前である。しかも哲さんは台湾の先生をしてゐるので東京へかへる日がない。それでとう／＼家の人におくられもせずさびしく出征してしまつた。歓呼の声におくられて出征したのだらうが、さびしかつたらう。僕等は長距離電話でおわかれのことはをかわした。哲兄さんの声はふるえてゐた。「僕は御機嫌よう。元気でいつてらつしやい。」といった。

十一月の中旬、哲兄さんから手紙が来た。この手紙でサソリだのワニだとかがゐるといふので、海南島だらうといふ事がわかつた。軍隊では場所がひみつだからだ。

翌年四月十八日だつた。負傷という伝が、をぢさまから来た。おどろいたのおどろかないの、僕はびつくりしてしまつた。とにかくたまがあたつたが命にさはりないそうだ。手紙を見ると海南島で敵前上陸をしてからの事だ。

海南島の家はバクダンでやられて屋根はない。それで雨もりをふせぐために材木をさがすべしといふ命令が出た。それで材木をさがすついでに、人間様の餌があつたらとつてこようといつて出かけた。サギといふ鳥がたま／＼みられる。景色のよい水田をゆつくりあるいて行つた。

支那人は日本兵を見ると、どん／＼にげ出して、山の上で、日本兵を見物してゐる。支那の家を一軒一軒とたづねるうちに、ぶう／＼／＼、やあゐたぞとおひまはしてつかまへた。手をゆはえて棒にさしてぶらさげた。すぐかつがうと思つたが、きもちがわるい。日本兵はよはむしといふのではない。豚などかついでではえらそうに見えないからだ。

支那人にかつがせてかへつて来た。きつと天にかはりてふぎをうつとうたひながらかへつて来たであらう。途中水田をうねくまがりくねつて、もときた道をかへつて行くところいものがばらくと見えた。と思ふとたんブツンくヒューヒュー、二百米ばかりの所に四十人ばかり、ひゆうくつづけまにたまがとんできた。とつきに水田の中にとびこみ、くびだけ出して、もぐらみたいにしてだんくあとにさがつていった。さがるにも足が水田にすひつてようにぬけない。これこそ命がけだ。その時ゆうかんな兵士が、すこし上の高くなつた所のかげにかくれて、二三ぱつうつたそうさ。敵がすこしひるんだ所をだんくとさがつていった。いく分か弾のくるのがへつた。いゝと思つて立上がつたとたん、ぐわんと後からだれかに一なぐり。「やあやられたか。」間もない事だ。だんくおなかの方があつたかくなつたので、シャツをあけてみると赤い血がべつとりついてゐた。弾が後から前へぬけ出してしまつたのだ。かんつうじゆうさうである。あたつたらこれまでと度胸もすわつて、ともだちといつしよに、立上りかけた。かへりかけに、のどがかわきはじめたので、ともだちに水とうから水をくれといつた。すると、ともだちはだめだといつた。

それから六里あるいたさうだ。出血は多量だが、意識はたしかだ。死はちかづいたやうすもないので、少し水をのんだ。それから二里あるいて、とうとう本隊にかへつて来た。命にべつじやうないさうだ。僕が哲兄さんといつしよに戦地にいったやうによくようすを知つてゐるのは、哲兄さんの手紙をみて想像してかいたからだ。そしてとうとう哲兄さんは後送となつて、十月四日ごろかへつていらつしやつた。

「哲兄さん」は、「叔父さま」の息子つまり、作者の従兄弟であるが、その従兄弟の手紙が作品のもとになった。この作品から分ることは、台湾での召集令状では、実家に帰る時間はないということ。

手紙の発信地は秘匿されていたものの、十一月中旬の手紙は「海南島」からだと推測している。「海南島」に、第五艦

隊の援護の下に、第四根拠地隊・台湾懇請旅団などが上陸したのは、昭和十四年（一九三九）二月九日。

「海南島」は、南方進出と援蔣ルート遮断のための航空作戦基地として海軍が要望していたもので、「ほとんど抵抗を受けずに」（『昭和・二万日の全記録5』講談社、平成元年十一月）上陸は成功したとのことであるが、従兄弟が負傷した経緯にあるように、上陸後、二ヶ月、敵兵は一掃されていたということではなかったようである。

また、この作品は、日本軍の補給が、原則として現地調達であり、食料の豚を農家から徴発し、しかも現地人に担がせていたことも伝えている。

更に又、背後から狙撃を受けたものの、「貫通銃創」によつて一命を取りとめ、本隊にたどり着いて、治療の為、日本に「後送」となり、十四年十月四日ごろに帰ってきたとの事である。

一人の兵士の入営から「後送」までが分る作品であり、戦時下の記録の一つである。

五 「学校」での出来事

けんくわ

楠組 T・Y（女子）

私は五年の一学期から成城へはいました。私と古ちやんと試験が通つたので楠組にはいました。

一学期の時は、古ちやんと私が一番なががよくて、どちらかがやつた事はすぐにおたがいに知らせるといふわけで無線電信と言ふあだながついてゐました。それが二学期から急に、私たちと古ちやんとながわるくなりました。

私達は新宿を通つて行くので一しよに帰らうとすると、「あたし用があるの」とかいつて、いつも立川さん達と帰るので私はしやくにさわつて、なるべく古ちやんと遊びませんでした。

修身の時間によく古ちやんや立川さん達の問題が出ました。古ちやんが泣くとすぐに男の人がかせいするので、私たちはをかしくなりました。古ちやんはまるでそれをいきにしてゐるらしくさへ見えるのです。こつちから何か言

ふとすぐに、「しらない」といふのです。そしてよく井上さんとにらめっこをしてゐます。国史の時間に古ちやんが私をにらんでゐるのでしやくにさわつて私にもにらみかへしてやりました。

そしてよく勉強中に、古ちやんと向ひ合ひの席に居る井上さんが、古ちやんのひざの所をけつてゐるのでをかしくなりました。或時の事古ちやんが、「よしてよ」と言つたらしく、井上さんが、「だつてあんたがわるいんですもの」とかなんとかいつてけつてゐました。古ちやんは教室にはいるとくつしたを下におろします。それはけられるとくつしたがよごれるかららしいのです。この間古ちやんが井のちやんの足をけつた時、ちやうど傷のある所に當つて、かさぶたがとれて血がでてきたので、古ちやんもずゐぶらんぼうだなあと思ひました。

学校のらうか等で古ちやんに合ふと、わざとつきあたつてからいきます。そして私がぶつからうとしたら古ちやんがよけたので私は向ふへいつてから古ちやんにぶつかりました。

その後四、五日たつてから、修身の時に又古ちやんの問題が出ました。陸ちやんが、「この間おれが見た時、吉と竹岡が古屋に紙をぶつけてゐた。さうして竹岡は上からぶつけて吉は下からわからないやうに投げてゐた」と言ひました。

先生が、「どうして紙をなげるの」とおつしやいました。

あんまりしやくにさはつた時、紙をぶつけると古ちやんがへんな顔をするのがおもしろいので、紙をぶつけたといふわけだけでも、なんだか先生の前では言へないので、ただ笑つてばかりゐたら、先生が、「ぢやあ竹岡はどうしてだ」とお聞きになつたが、やつぱりだまつて吉ちやんと顔を見合せてゐました。

しばらくしてせんせいが、「ぢやおたがひになかよくするんだなあ」とおつしやいました。そしたら山ちやんと井のちやんが、「あたしたちはなかよくしようと思ふんだけども向ふからこないんだもの」と言ひました。

それからまだまだなかなほりをしなかつた。二週間ばかりしてからの水曜日の修身の時間に両方から「ごめんなさい

ね」とあやまつて仲よくなりました。

仲よくなつてから、いろいろ考へてみると、おこらなくてもいい所をおこつて見たり、ぶつかつたりしたところが、あんまりやりすぎだつたと思つた。けれども早くなかなほりが出来てよかつた。

いわゆる「いじめ」は、いつの時代にもあるというこの作品。「修身の時間によく古ちやんや立川さん達の問題が出ました」とあるように、「古ちやんや立川さん達」は、女子のクラスメイトからは問題視されていたようだが、男子児童は、槍玉に上がつて泣き出す「古ちやん」に「かせいする」という。女子は、これも気に食わないことのひとつのようである。作者の視線は、するどく男子児童にも向けられているということ。

「古ちやん」をいじめる理由を、先生に聞かれたからとて「言へないので、ただ笑つてばかり」いることになる。当然の成り行きだ。苛める側には苛める理由があるということが、よく描かれている。苛めていた当時をしっかりと振り返つている作者がいる。

この作品の直前に掲載されているのが、「古ちやん」の「なかなほり」（楠組、F・Y、女子）だ。この作品によると、「古ちやん」は、「立川さん」を「親友」とからかわれ、「二人仲がいゝわ」と言つて笑われたことに、深く傷つた。

電車の中で、先学期に成城にはいつてから、今までのことを考へてみると、市ヶ谷へつた。バスに乗かへて、家の前まで来たら急になしくなつて、家へかけこんで泣いてしまった。

仲直りが出来たのは、「水曜日の修身の時間」であり、その時間は、焼芋会のために薪を集めていた時のことだった。

山ちゃんたちが集つて、何か言つてゐた。そして山ちゃんが、「古ちゃん今までごめんちやい」といつた。中ちゃんも、みんなもいつた。私も、「私こそごめんちやい」といつて仲なほりした。私は、一日も早く、仲なほりしたかつたので、とてもうれしくなつた。

喧嘩と仲直りは、確かにいつの時代にもあることだが、「なかなかほり」は、中々難しい。「桶組」は、それを一つ乗り越えたということか。

六 「学校」外での出来事

「けんくわ」(桶組、I・S、男子)は、他の小学校生との喧嘩が内容。

学校で昇君が「きのふなぐられちやつた」といつたので、僕が「だれになぐられたの」と聞いたら「いなかつぺえだよ」といつた。

僕も一度代々木の原でいなかつぺえみたいなのに、あつたときが思ひだされたので、昇君に「やつつけちやおうか」といつたら、昇君が「やつつけてくれ」言つたので、僕と川本君と許君ですけだちに行くことになつた。

(中略)途中まで行くと、小さい子供が僕たちを見て向ふの方へにげてしまつた。見てみると、それが僕たちぐらゐのやつになにやらいふと、今聞いたやつが又外のやつに、何とか言ふと、そいつは自転車に乗つてどこかへ行つてしまつた。許君たちは「あのちつこいのスパイだな」と、いつてゐた。

(中略)川本君たちは敵とにらみあいをしてゐるやうだ。「どうしたい」と声をかけた時敵がせめてきたので坂の下まで退却した。其時また横から敵がせめてきたのが僕たちはそれを横道までせめこんだ。すると敵は石をもつて、なげようとするので、あぶないから、棒をとりながら坂の真中まで退却した。すると敵のやつが「棒なんかもつてひき

やうだぞ」といつたので僕たちは「石すてれば棒すててやらあ」といつた。敵は「石すててやらあ」といつたので、僕たちは棒をどぶの中にした。するといきなり石を投げ出した。ひきやうなやつだなど思つたので、僕たちは石のあるところまでしりぞいた。そしてこつちも石をなげた。僕は「ようし」と思つてなげるのだがあたらぬ。敵は外の人が居ようと居ないとにかまはないで、なげるがこつちは投げなかつた。

「僕たち」は、きれいな戦いぶりをみせていたが、「どんく／＼投げてゐるうちに、どつかに逃げて行つてしまつた」という。「僕たち」の勝ちということであろうが、違ふ小学校に通うものとの諍い、これもよくあつた出来事。この文集が記録したもの一つがここにある。

児童文集『むさし野』第四輯は、昭和十五年三月十二日の発行日付であり、この時期、昭和十二年七月七日の「支那事変」に端を発し、日本軍が中国大陸への怒濤の展開を見せていた戦時下を背景とする。

確かに、九四作品中戦時下を内容とする一九の作品があり、その割合は二割に及ぶが、身内の入營・出征はなく、飼犬が軍犬として出征するのみである。

また、九四作品には、一人の従兄弟の外には、父や兄といった肉親が軍隊にいるとの表現はない。

因みに、第一輯（昭和十一年度）では、九五作品が収録され、時局柄の用語表現をもつ表題は「二・二六事件」の一品のみ。

第二輯（昭和十二年度）では、六九作品中、次の五作品の表題に見られる。「桜井少将の話」「海戦遊戯」「友達の兄さんの出征」「九一式戦闘機模型製作」「旅順見学」。「桜井少将」は、学園の父兄であり、「旅順見学」は「新京のお父様」の所へ行く途中に見学したもの。

第三輯（昭和十三年度）では、一四三作品中九作品。「防空演習」が二作品。詩「ぼうくうえんしゆう」が一作品。「兵隊さん」「兵隊さん」、「お父さんのしゅつせい」「先生の出征」、「ゐもんぶくろ」、「兵隊ごっこ」。

第四輯（昭和十四年度）では九四作品中一九作品となり、年度を追うことに増加しているわけであるが、言うまでもなく、戦時下の展開に沿って増してきたものであろう。

『むさし野』第四輯は、戦時下でありながら、戦時下を児童に強いてはいない。成城小学校における戦時下の教育が作品に見られるのは「強行軍」のみであり、当時、尋常小学校の児童に要請されていた神社への武運長久への参拝や兵士の入営・出征見送りといった作品は見られなかった。尋常小学校が地域に根ざした集団であり、戦時下における児童組織として大人たちに利用されたことからすれば、この時期、まだ私学ゆえの「学校らしさ」が残っていたということであろう。

『むさし野』第四輯は、戦時下にあつて、時局柄に沿うために児童の心情が飾られたり、隠されたりすることなく、等身大の内容を持つて表現されているといえる児童文集であるといえよう。

（二〇一一・一・一七）

（付記）成城学園教育研究所におかれては、「むさし野」をはじめ、『成城学園五十年史』『成城学園父兄名簿』の閲覧を
ご許可下さった。記して謝したい。